

殆禁詩集

小寺謙吉

小 寺 謙 吉
発 禁 詩 集

評論と書誌



西澤書店刊行

発禁詩集 奥附

限定二〇〇部

著者	小寺謙吉
刊行者	西澤楯雄
印刷	東京創文社印刷所
製本	今泉誠文社
発行	西澤書店

東京都中野区松ヶ丘一―二二七

昭和五十二年六月廿九日發行
頒価 五、〇〇〇円

『社会主義詩集』——発禁、一号——

児玉花外詩集

明治三十六年九月、児玉花外の『社会主義詩集』は、内務省告示第五十七号により、発禁処分を受けた。平民新聞の発刊される三カ月前のことである。

「これらの小詩は吾が宗教とする社会主義の讃美歌にして、また黄金跋扈の大魔界に対する進軍歌なり」

という序詞ではじまるこの新体詩集は、このような社会的諸情勢を背景として刊行され、発禁詩集第一号の榮譽をになったのである。この詩集から、今日汲みとるべきものは、日本の社会主義運動の揺籃期に、花外が先んじて叫んだ反権力と自由の精神でなければならぬが、この詩集には日清戦争以後、徐々に湧き立った明治社会主義のヒューマンな特徴が至るところに見られる。そこには詩としての独立した運動よりも、社会主義運動そのものの政治性が強く反映されており、それ故に、反抗的な社会認識が詩人としての資質を十二分に発揮させるに至らぬ憾みも残っているかのようである。

これは何も花外だけの問題ではない。例えば、社会主義が政治的にも思想的にも新しい時代の曙の若さを象徴していたのにくらべて、花外をはじめとする社会主義詩人の詩は、ほとんど七五調の新体詩であり、いわば新しい酒を古い器に盛るといふ文学的な古さに終始していた。

ざっと分類して、社会主義詩人たちには児玉花外、大塚甲山、小塚空谷らのような社会主義思想の影響を深くうけた詩人と、幸徳秋水、堺利彦、山口孤剣、木下尚江、西川光次郎、中里介山らのような社会主義運動のために詩を利用した人びとに分けられるが、中には松岡荒村のように、すぐれた詩人として社会主義者の道を歩き、夭折した人もいた。しかし明治政府の压制下では、社会的諸条件を解放する政治運動が一義的なものであり、そのために、文学も詩も、反国家活動の一環としての役割を要請されたのであった。いわば文学と政治の問題は、社会主義運動のための詩という次元で、それは昭和のプロレタリア詩の問題を、その延長線上に胎んでいたのである。

『社会主義詩集』の発禁は、当然のことながら「社会主義」の発禁であって、そのウエイトは「詩」の発禁におかれたものではなかった。したがってそこにあるものは政治的問題で、文学の問題ではなかったのである。もちろん、それだからといって花外を過小に評価することは許されないと私は思う。巷間、花外を評して詩の上手でない詩人だという説もあるが、私は新体詩という形式の枠内で、社会的不平等にあえぐ民衆の生活の不満や、うたいがたい階級矛盾や社会問題を七五調にまとめた努力は、かなりの成果をみせていると思うのである。七五調新体詩の桎梏が新しい社会主義的発想を抑

制していることは否めないものの、少なくともそれらは権力批判の武器としての詩あるいは詩的散文としての時代的意義をもつ一群の詩であった。

吾等は人ぞいつまでか

不幸不運を忍ばむや

無情無道の資本主の

富の犠牲に終らむや、

今ぞ、習慣はた制度

不利の貧者のそが為に

不法を挙げて絶叫^{さけ}ぶべし。

(労働軍歌)

黄金^{こがね}は照らす政治界

地主、資本家跋扈して

社会の蔭に民ぞ泣く

哀れ今の世君あらば

悲憤三斗の血を吐かむ

嗚呼、金権は地に勝ちて

正義、自由は死せんとす。

（大塩中斎先生の靈に告ぐる歌）

頭回せば、この社会

あゝ信長や光秀や

さても似る人いま多し

弱きは何の罪かある

花にもあらず地に踏まれ

血潮の河は流れたり

起てよ、起たずや、起たざれば

嗚呼、千載に恥辱あらん

（本能寺の跡に立ちて）

『社会主義詩集』にみなぎる最も特徴的な抑揚を、いくつか例示したが、政治権力と資本家の圧制を徹底して憎み、社会主義進軍の旗を振ることで、主義の宣伝啓蒙に役立つ詩的散文といえよう。これらの詩は、花外にとって現実を「黄金跋扈の大魔界」とする認識から出発しており、彼の「宗教」であった「社会主義の讚美歌」である以上、当然のことでもあった。だが花外は、権力者に直接プロ

テストすると同時に、権力によっていたげられる民衆の苦悩を注視して、多様な下層階級の生活実態にヒューマンな感情をそそぎ、その結果、階級矛盾をみごとに表現してみせるのである。

「紡績工女」にしても「運転手嘆きの歌」、また「新聞幼工の歌」も、花外の詩の巧拙を問うよりも、彼らの惨憺たる生活に注目すべきであろう。もっと絶望的な歌もある。

鬼こそ堪へめ 人なるを

長き苦しき労働はたらきに

身は青草の細くのみ

一たび肺を病みしより

血を喀はき逐はる杜鵑ほととぎす

彼方此方とさまよひて

今はすみかもあら悲し

血に啼き狂ふばかりなり。

（失業者の自殺）

「血を喀き逐はる杜鵑」とか「今はすみかもあら悲し」などという表現は、この社会問題を力強いテーマで訴求する効果を弱めているが、当時、さかんだった社会主義啓蒙のための伝道旅行などに

は、花外の詩の哀切なメロディは、いやが上にも悲壯感を煽りたてるものであった。そして権力がひそかに怖れたのは、花外の文学的表現力を通じて、社会主義が民衆に滲透してゆくことであつた。『社会主義詩集』の発禁は、まさにその事を畏怖した権力が、花外が指摘した生ま生ましい社会矛盾を陰蔽するための圧殺手段であつた。

微笑みて死したる翁こそ

実にこそゑみて逝きにけれ

不均不調の現社会より

悲しみ、嘆き、饑餓もなき

平等界の死の国に。

（幸か不幸か）

「不均不調の現社会より、悲しみ、嘆き、饑餓もない」「平等界の死の国に」行った方がまだという社会的貧困は、「浮世の風ぞ醒く、黒暗々の地獄かな」（「破壊」）と相対応しているが、社会の底辺に逼塞する民衆の生活的立場を、一貫して描写した花外の反骨と正義感の特筆するに値いしよう。その悲憤慷慨調は、花外の一途な性格と誠実さを物語っているが、特に「社会主義者の父と呼ぶ／カル・マルクスの名によりて／吾は抱かなむ、可憐児よ。」（「可憐児」）のように、マルクスの名によ

って可憐な赤ん坊を抱くなどというのは微笑を誘うものがある。多少、生硬ともみえる表現の中に、私たちは花外の真摯な態度を見出すことができるのである。マルクスやラサールの名が詩の中に出てくるのは、これが日本では最初ではないだろうか。

前述のように、花外はいち早く、明治三十一年の『東京独立雑誌』に「鶏の歌」を載せて「革命をそれ鶏の／声になぞらへ歌はん乎」と、はじめて「革命」を詩に織り込んだが、これは当時の詩壇では画期的なことであった。当時の詩壇は島崎藤村の『若菜集』によって新しい抒情詩の時代が開幕されていた。藤村によって「遂に」来たこの「新しい詩歌の時」は「ただ穆実なる青年」によってたらされたものであったが、彼らをして「感激の涙」を流さしめたという「清新横溢なる思潮」を主張するものも、また「近代の悲哀と煩悶」に大いに狂ったものも、共にそれは天来の声に憑かれた憧憬であって、地上の現実注目すべくもなかったのである。それは明らかに、透谷が挫折した政治的問題から目をそらした形而上の情熱燃焼であり、土井晩翠、薄田泣菫、蒲原有明、横瀬夜雨、上田敏、河井醉茗、与謝野晶子、鉄幹等は、みな然りであった。そうした中で花外は、ひとり先んじて「社会主義」を詩にうたい込み、地上の現実を見きわめつつ、人民の悲惨な生活の中に自己の詩的テーマを探索しつづけたのであった。これは詩史的にみても十分評価されるべきことであらう。

『社会主義詩集』については、それが闇から闇に葬られて刻板原稿その他を根こそぎ押収されたために、現在までこの詩集の实在をめぐる真疑が、間断なく論議されてきた。だが実物はいまだかつて

発見されたことがなく、一、二、実物を見たと称する人も信憑性に乏しいうらみがあつた。今日、『社会主義詩集』の一応の全貌は、岡野他家夫氏による同名の復刻本（昭24・日本評論社刊）によって見られるが、岡野氏が『社会主義詩集』全三十篇の詩の題名を知つたのは、明治三十六年八月十八日発行『社会主義』第七年第十八号に掲載された広告によつてであつた。岡野氏がその目次をたより、片山潜主宰の『社会主義』や内村鑑三主筆の『東京独立雑誌』等の諸雑誌を丹念に渉獵した努力は多としなければならぬが、私の調べた範囲内では、三十篇の詩の中でも数篇は不明のものがあつり、岡野氏もまた、復刻本の「あとがき」（二二四ページ）で、その不明の数篇を原本で見たことと芥川徳郎氏の好意で完全な写本をつくることができたとして述べている。だが、果してそうだろうか。

私が二十年來の追跡の結果、大阪府警関係者の筐底から奇しくも発見した『社会主義詩集』の稿本を、芥川徳郎氏所持の写本と照合したところ、用字、用語、句読点、ルビ、行分けその他でピッタリと一致したのである。それはページ数にして一二六ページになるが、原本を見たという岡野氏は「約八十ページ」（同著八十六ページ）と記している。書誌的記録は厳密でなければならぬし、まして『社会主義詩集』のような幻の詩集といわれる稀覯本の書誌記述に「約」というのは妥当な表現ではあるまい。岡野氏が『花外詩集』三十篇七十九ページから推論して、『社会主義詩集』の三十篇を約八十ページとしたのならともかく、当時の金尾文淵堂出版の他の刊行物の組方、ノンブルその他を参照しても、とても約八十ページでは収納できないと思われるのである。岡野氏が自ら語っている「芥川

徳郎氏の好意でゆっくりと全篇の補正を試みて完全な写本をつくることが出来た」ということは、芥川氏所持の写本が、それまでの唯一のものである事実を岡野氏も認めていたからであろう。芥川氏所持の写本は、昭和十八年に神戸の入江信夫氏がペン書転写したものを、芥川氏に贈られたものだが、芥川氏がその後、金尾文淵堂主人から神田図書館で聞いた話では、金尾氏が『社会主義詩集』発禁直後に写本をつくり、それを入江氏に贈ったということだった。芥川氏所持のものは、そのまた写本ということになるわけである。

また、岡野復刻本と、私の発見した稿本のいちじるしい相違点は、ざっと照合しても五十カ所以上に及んでいる。おもなものを比較してみよう。

◇誰かに問はむ（誰にか）……労働軍歌◇富者の酣醉（酣睡）……大塩中斎……山は一夜に越えも
えん（越えうとも）◇誓つて出でし（誓ひて）◇われは東の古里に（故里に）……紡績工女◇つも
るに似るか尺の雪（天の雪）……雪の家◇昨夜（ゆうべ）より降りし（昨夜）……春雨◇声になぞらへ歌はん
乎（歌はむ乎）◇かぶせき狭き埒（いぶせく）◇阜蟲（いなど）の騒ぐ（阜蟲）◇餌（ぼった）をわかへの（わかつの）
※『風月万象』には餌を与ふると収録されている◇偽善の白衣身（びやくい）に（白衣）◇埋（うめ）められにし人（埋
められたる人）……以上「鶏の歌」◇道往く人の買ふを待ち（待つ）◇歩むに變へぬ扮装（なりすがた）（扮装）
……支那パイプ売り◇人も機械も忙しけれ（せわしなし）◇墨をば塗られでは（塗られては）◇早
く憂世（うきよ）の憂（うき）の字（うき）を（憂の字）……新聞幼工の歌◇前に琴ひく籠（かご）の鳥（前に琴ひく籠の鳥）◇答はき

びしき（鞭はきびしき）……鳥屋の娘◇頼みはあらず（頼みはあらじ）……農夫◇人に知らさで
（人に知らざる）……米磨ぐ女 ◇深き恨みは幾見ぞ（幾尺ぞ）◇稠度の中にのゝしられ（のゝじ
られ）◇起てよ、起たずや、起たざれば（起たざらば）……本能寺……◇世界碎けや（苦界）……破壊
◇輝く栄え衣きて（耀く栄えの衣きて）◇蛇床子（蛇床子）……海辺の古寺◇堪忍の緒をば千切り
て（千切りつつ）◇日月照らす地の上と（地の上に）

※（ ）内が稿本による異同点

岡野復刻本と稿本との比較の中から、真実の『社会主義詩集』を発見するためには、花外の詩の方
法的特徴を究め、それにもとづいて両者を比較研究して、結論を得るしかないであろう。もちろんこ
の両者には、それほどの大差があるのではない。また発禁となった『社会主義詩集』中の作品は、花
外の第三詩集『ゆく雲』や第四詩集『天風魔帆』などに、かなり収録されていて参考になる。

私は、児玉花外を『社会主義詩集』が発禁になったためにのみ記憶される詩人だ、という説に組す
るものではない。その七十年の詩人的生涯の最後まで、ヒューマニズムの情熱を一貫した詩人として
彼を読み、考える者には明治を代表する詩集とするに、やぶさかであってはならないと思う。発禁は
花外の生涯を放浪者として終らしめたほどの弾圧だったのである。

『天風魔帆』——後退せぬ反抗の詩心——

児玉花外詩集

花外については『社会主義詩集』の発禁について語りつたえる声が、あまりに高かったために、彼の第四詩集『天風魔帆』が、同じ発禁の憂き目を見たことについては、あまり語られることがなかった。花外を襲った第一番目の発禁の打撃は、その生涯の運命にまで及んだと一般に見られているが、第二回目の権力の断圧がそれをさらに拡大強化するものであったのは、今さら指摘するまでもないこと、花外ほど検閲制度に痛めつけられた詩人は、空前、もちろん絶後であろう。

彼は『社会主義詩集』が発禁となった後も日露開戦を前にして、急迫した国内状況と窮乏する人民の生活に対して、人道主義の立場から、雑誌『社会主義』などに詩の発表をつづけたが、その翌明治三十七年、同じ大阪の金尾文淵堂から『花外詩集』を出版、その末尾には、有名な五十九氏の「同情録」が付録となっていた。『社会主義詩集』の発禁処分に関心した人びとが、花外を励まし、慰め、あるいは処分の不当を述べる文章を贈ったものである。主なる人として、岩野泡鳴、幸徳秋水、西川

光次郎、徳田秋声、鳥居素川、小栗風葉、河井醉茗、中村春雨、松崎天民、小塚空谷、安部磯雄、木下尚江、堺枯川、平木白星、高須梅溪、後藤宙外、大町桂月等々の名があった。花外は、この年上京して、翌明治三十八年には、わが国はじめての社会主義文芸雑誌『花鞭』の発起人となり、明治三十九年には詩集『ゆく雲』を刊行した。

そして、三十九年の十二月二十八日印刷、同四十年一月一日発行として世に出た詩集『天風魔帆』が、花外にとって二度目の発禁という不運に遭遇したのである。この詩集の中の「本能寺の跡に立ちて」「可憐児」「天露」「越中島の朝」（「失業者の自殺」改題）「鳥屋の娘」「新聞幼工の歌」「大塩中斎先生の靈に告ぐる歌」の七篇は、『社会主義詩集』の作品がそのまま移されているが、そのことは花外としてやむにやまれぬことだったのであろう。

大阪府警関係の古老が語った「『社会主義詩集』は印刷所から刻板原稿その他を根こそぎ押収したもので、一冊も製本されたものはなかった」というほどの処置にたいする精いっぱい反抗であったと見られぬこともない。また「大塩中斎……」をはじめとする、おだやかではあるがヒューマンな情熱を失わぬこれらの数篇を、彼はどうしても紹介せずには詩集を編めなかったのもあろう。

そのことが彼の意図に反して、再び発禁の理由となったのか、新しく書かれたその後の詩が忌諱にふれたのか、その間の経緯はすでに遠く、判明しがたいが、私たちはこの『天風魔帆』が『社会主義詩集』のもつ反抗の詩心から後退してはいないことを知るのみである。

詩人花外は、生来、自然の風物の推移に感じやすい人で、そのおもかげは至るところに散見するが、自然の移りかわりに感動する、そこにはあきらめがあり、社会の不平等については、それを権力人爲のものとして許さざるところに、花外の明治的社會主義があつた。

明治の日本は、その支配者たちの、相次ぐ發禁の措置で、花外を落魄の境地に追いやることは出来たが、ひとたび發した詩心は現在にもなお生きて、あるいは發禁詩集として發掘、または復刻されて六十年の後に彼の情熱は、流寓のはてに死んだ詩人を超えて右往し左往する。「秋思」（遙に大塩先生の墓に）という詩の、終りの一節を紹介しよう。

あゝ、山青く、野は広し、

いづこか骨の捨てどころ

我も小さな墓となり

日本の国にただ二つ

君が後へに唄はれむ

かく遙かに、花外はうたっているが、自己をいったん「社會主義詩人」と標榜しながら、二度にわたって絶対主義権力に押しつぶされ、粉碎されてゆく過程は、悲劇の詩人としての彼の後半生をいら

だたしいものになっている。花外のそれ以後の詩人的生命を辛くも支えたものが、発禁に対する焦燥感と、激情からほとぼしる虚妄の定型詩であったことは、花外にとって同情すべき転向といえよう。詩における権力の介入が、一人の有為なる詩人の一生を葬り去った、その典型として私たちは児玉花外の名を忘れることはできない。

*『天風魔帆』児玉花外詩集。明治四十年一月一日、平民書房刊。体裁・菊半截判布装上製。口絵一葉、目次五頁、本文一五二頁。定価三十五銭。